

# 洋上風力発電と野鳥

— あまり知られていない影響とその対策 —

講師：風間 健太郎

早稲田大学人間科学学術院 准教授



2019年4月に再エネ海域利用法が施行され、全国各地で洋上風力発電（以下、洋上風力）の導入計画が急増しています。お住まいの地域や海辺の野鳥観察フィールドのそばに洋上風力の建設計画が持ち上がっている方も多いのではないのでしょうか？

洋上風力は、二酸化炭素の排出量が小さく環境への負荷が小さい再生可能エネルギーの一つとして期待されていますが、海鳥にとっては大きな脅威となります。陸上風力と同じく、洋上風力でもバードストライクは生じます。洋上風力の脅威はバードストライクだけではありません。多くの海鳥はバードストライクを避けるために風車を迂回して飛行します。迂回によって衝突死は避けられるものの、海鳥は餌とりや渡りの時に最短距離をたどれなくなることで、余計な飛行エネルギーが必要になります。また、洋上風力の建設によって餌である魚が減ってしまうこともあります。

洋上風力が早くから導入されたイギリスでは、2000年代のはじめ頃、洋上風力の海鳥への影響が数多くの鳥類研究機関や保護団体に問題視されました。建設計画をめぐって訴訟が起こされたこともあり、そのうちのいくつかでは洋上風力の建設許可が取消された例もあります。イギリスではこの経験が活かされ、現在では海鳥が多く集まる海域をあらかじめ示した地図（アボイドマップ）が建設地を選ぶ時に活用されています。

日本でも環境省やいくつかの研究機関がアボイドマップを作っています。しかし、日本では法律による定めがなく、建設地を選ぶ時や建設直前の環境アセスメントでもアボイドマップが有効に活用されていません。また、海の環境は変わりやすく、海鳥の分布や行動は地域や季節、年により大きく変動します。そのため、アボイドマップを活用しても洋上風力の海鳥への影響を事前に正確に把握したり予測したりすることはとても難しいという実情もあります。

このように、現時点では洋上風力の海鳥への影響を減らすたしかな手立てはありません。そのような事情の中で今後洋上風力を健全に導入していくためには、現在義務づけられている建設前の環境アセスメントだけでなく、建設後にも継続的な調査を行い、その結果に合わせて運用方法を柔軟に変える必要があります。鳥の繁殖時期や渡り時期には風車を一時的に稼働停止にするなどの安全側に立った運用も必要でしょう。

## 講師プロフィール

1980年埼玉県所沢市生まれ。2010年北海道大学水産科学院博士課程修了。博士(水産科学)。名城大学、北海道大学を経て、2019年から現職。北海道北部を中心にウミネコをはじめとした海鳥類の行動と生態について研究中。著書に『はじめてのフィールドワーク③日本の鳥類編（東海大学出版部）』、『鳥の行動生態学（京都大学学術出版会）』（ともに共著）などがある。2016年日本鳥学会黒田賞受賞。



日時：令和2年11月7日（土） 14：00～15：30  
オンライン開催（再配信：11月8日（日）12：00～13：30）  
主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所